

思い草

第21号

平成28(2016)年12月2日 発行

科学する眼に基づいた「観察力・洞察力」を磨こう

キャンパス長・人間開発学部教授 おおもり としお 大森 俊夫



今年から教育実践総合センターの運営委員になり、人間開発学部の特色である2つのセンターの運営に携わることになりました。両センターの仕事内容は多岐にわたりますが、インターンシップや学校ボランティアを始め、大きな行事である共育フェスティバルや地域ヘルスプロモーションセンターの地域交流スポーツフェスティバルなど現場体験をする企画が多く組まれています。

現場での「実践する力」を伸ばすことは学部の特色でもありますが、現場を経験すれば必ず身につくものでもありません。学部では多くの専門分野の知識・理論を指導していますが、現場ではその知識・理論などを統合して指導に生かさなければなりません。そこで役立つ重要なポイントが「観察力・洞察力」です。観察とはただ見るのではなく細かく見ること、洞察とは細かく見たことからいろいろ考えることです。実際に学部の学生の活動を見てみると、初めの段階では自分の仕事をこなすのが精一杯で、周りを観察する余裕が無いのがわかります。その後、多くの企画に参加し仕事にも慣れ、周りを見る余裕が出

てきますがここで学生間に大きな差が出てきます。それは周りをよく観察する学生と、あまり観察せずに時間を過ごす学生です。結果としては同じ仕事を行ったにもかかわらず観察力・洞察力の高い学生がより高い「実践力」を獲得するのです。

私の専門の陸上競技など多くのスポーツで観察力・洞察力の違いが強いチームと弱いチームの差になっています。特に陸上競技や水泳は物理学の法則に依存するスポーツですので瞬時に関節の角度・重心の位置や移動、動きの効率などを観察し見極め、解剖学・運動生理学など専門知識に基づいた筋力強化や動きの改善点などを指摘することが良い結果につながっています。また観察力・洞察力はコミュニケーションを円滑にするための基本でもあり、チームプレーなどにおいても重要な要素になります。体の動き、顔の表情、声のトーンなどを観察することによって色々な状況が把握できます。学生には専門知識を身に付けると共に多くの人と楽しい時をすごせるよう観察力・洞察力を磨いてほしいと思います。

若かった日の思い出

人間開発学部教授 ふじい きいち 藤井 喜一



教育実習の訪問指導の時のことである。研究授業までの時間があったので、学校長が校内を案内して下さった。廊下を歩きながら、教室から漏れてくる教師の声や子どもたちの声を聴くうちに新卒の頃先輩から言われたことを思い出した。

「廊下を歩くときは耳を澄まし、その教室の雰囲気を感じなさい。教師の話し方や子どもたちの声を聴くと勉強になるよ。また、放課後、教室の掲示を見させていただくといい。先生方の様々な取り組みが見えてくる。そして、もしそこに先生がいたら遠慮なく質問をすること」このようなことであったと記憶している。

それまで何気なく歩いていた廊下であったが、教室の内側に神経を集中すると、確かに子どものざわめきや先生の話し声が、それまでとは違った聞こえ方をするようになった。静かな教室に響く表情豊かな先生の読み聞かせの声、逆に子どものざわめきに負けにくいぐらいの大きな声、子どものざわめきも、ただ騒いでいるだけのものと、何か子どもたちの活力を感じるものが

あることも雰囲気からうかがい知ることが出来た。

教室の掲示からも様々な工夫が見て取れた。画鋲の使い方一つにしても、そこからたくさんのことを学ぶことが出来た。事務処理の方法、紙のさばき方、掃除の指導、給食の指導など、一人一人の先生方独自の方法を数多く教えていただき、真似をすることから、授業にも教室環境を整えるのにも生かすことが出来、そのうちに自分の方法として定着していった。また、校内研究会だけでは時間が短くなかなか深まらないことも、各先生方と個人的に話をする中で、独創性のある授業論を詳しく聞かせていただくことができ、大変勉強になったものである。

こうした学校の教師集団の持つ力、すなわち学校力と呼べるものが、かつての、私のような若い教員を包み育ててくれたのだと考える。

さて、来年の3月で退職を迎える今、私がかかわった学生が先生として勤務している学校を訪問して歩いてみたいという夢を見ている昨今である。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教育実習・保育実習

教育実習は社会人としての第一歩である

てらもと たかひろ
人間開発学部准教授 寺本 貴啓

教育実習に対して実習生は、教師としての研鑽を積む、自分自身が教職に向いているかどうか見極める、など様々な思いをもって臨んでいるようである。教育実習に対して思いは様々であっても、共通していることは、一人の社会人として、仕事として、関わらなければならないということであろう。これまでアルバイトやボランティアでは「必要とされている」立場で働いていたものが、教育実習では「自分の資格取得のために受け入れていただいている」立場で指導教員の指導を受けながら学び、保護者の方から預かっている学校で、教師の立場で子どもと関わるのである。そのため、教育実習は真剣に取り組むべきものであることは言うまでもない。それでは、教育実習では何を大切にすべきなのだろうか。

実習先の先生方が実習生に求めることをうかがうと、①挨拶ができる、②元気に子どもたちと関わる、③真摯に学ぼうとする意欲、などが重要視されている。一方、実習生の専らの関心は、①授業が上手にできるか、②子どもどうまく関われるか、③指導案が書けるか、などが重視されているようである。このことからわかるように、実習生は「具体的な指導に関する方法」に関心があるが、先生方は「社会人としての意識や取り組み方」が重視されていることがわかる。つまり、「授業などはすぐにできるようになるわけではなく、失敗して当たり前」「自分から学ぼうとする方が良い」「時間を守ることや、やるべきことが一定水準でできることが大切」という意識の先生方が多く、実習生の「上手にする」という意識と違いがあるのだ。

実習校や先生方は、まずは社会人として、仕事へのこだわりや責任感等の意識、先輩や同僚、指導教員、子ども、様々な人とのソーシャルスキルがあり、その次に指導技術を求める。このようなことから考えると、教育実習で「教師としての研鑽を積む」ことを目標にする以前に、社会人として学ぶべきことが数多くあるといえよう。

教育実習からの「3つの課題」

かとうの まり
初等教育学科 3年 上遠野 穂

「かとうの先生を先生にしてあげてください!!!」

教育実習で担当した3年2組の児童が研究授業の後、訪問担当の先生を囲んで言ってくれた言葉である。私は、先生方からの親身なご指導のもと児童との信頼関係という恵まれた環境の中で勉強させていただき、1ヶ月の学びから3つの課題をもち帰った。

1点目は「個別の配慮」である。気になる児童に対し、活動や学習等する前に声をかける指導のことを指す。この指導は集団全体の学習を充実させるだけでなく、他の児童が「困った子」という先入観をもつことがないようにすること、また、該当児童が教師に見てもらえている実感を得て安心して学習活動に取り組めるという効果がある。ただし、偏見による事前の声を児童は敏感に見抜いてしまう。私は児童の信頼を失わぬよう、心に寄り添った指導をすることが大切であると学んだ。

2点目は「言葉以外の伝え方」である。私は話すことが好きで児童に何か伝える際も言葉による表現が多く、子どもの声が聞けなくなる、授業中私語が増える、などの問題が露顕した。これについて指導教諭から受けた助言を意識して参観すると、静かにノートをとる場面で鉛筆を置いた児童に「終わった？」と声を出さずに聞き、手でOKサインを示す先生がいらした。児童は、満足そうに姿勢を正し静かに待っている。私も動作や表情を工夫して児童と意思疎通が図れるよう技術を身につけたいと感じた。

3点目は「児童の発言に沿って進む授業」である。教師は指導意図をもつべきであるが、私は自分の考えた展開にとらわれ児童の発言や考えを待たずに授業を進めてしまった。先生方から「児童の発言の分岐に乗って掘り下げることによって授業を形成し、結果的に児童をゴールに導くのが教師の役目である。」とご指導いただいた。「ベテランの先生もできたりできなかったり一喜一憂することがある、一生勉強。」と励ましの言葉もかけていただいた。

4週間にわたり毎日同じ児童と関わることができ、成長のドラマに立ち会うこともできた。この経験を糧とし、課題の克服に努めながら本物の「かとうの先生」になれるよう努力していきたい。

夏季教育講座「保育・幼児教育実践フォーラム」

教育実践総合センター夏季教育講座

「保育・幼児教育実践フォーラム—質の高い乳幼児期の保育・教育の実現に向けて—」を開催しました

人間開発学部教授 かみなが みつこ
神長美津子

第8回目教育実践総合センター夏季教育講座が、「質の高い乳幼児期の保育・教育の実現に向けて」をテーマにして、8月27日に開催されました。

オープニングスピーチでは、子どもや子育てを取り巻く環境が大きく変わってきている現在、幼稚園や保育所、認定こども園では、保育・幼児教育の質をいかに確保し向上させるかが喫緊の課題であることを示し、今回のフォーラムの趣旨を確認しました。

その後の「問題提起と討論」では、乳幼児期のそれぞれの発達の時期に沿って、3つの課題を設定し、質の高い保育・幼児教育について具体的実践をもとに討論しました。第1分科会の課題は「0,1,2歳児の生活とカリキュラム」、第2分科会は、「3,4,5歳児の遊びと学び」、第3分科会は、「小学校入学前までに育ってほしいこと」です。各分科会では、神奈川県、東京都、横浜市などで日々子どもや保護者と向きあい園運営をなさっている園長先生方や行政の方に、現在抱えている課題やその解決のために取り組んでいること等についてお話をいただきました。分科会終了後、全体会にて、3人の先生から各分科会での話し合いの様子の報告をいただき、課題を全体で共有しました。

講演では、文部科学省初等中等教育局視学官湯川秀樹先生より、「幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型

認定こども園教育・保育要領の改訂を見据えて」というテーマで、現在中央教育審議会で進められている学校教育改革やこれからの幼児教育の方向について、お話をいただきました。これからの学校教育に求められる「社会に開かれた教育課程」、資質能力の3つの柱、主体的で対話的で深い学びを引き出すアクティブラーニング、幼児期の終わりまでに育っていく姿10項目等々、まさに現在改訂が進んでいる中で最新の話題をお話いただきました。

最後のシンポジウムでは、和洋女子大学の鈴木みゆき教授、学校法人横浜アイリス学園幸ヶ谷幼稚園の木元茂園長先生、学校法人調布学園田園調布学園大学みらいこども園の長南康子園長先生に、学校教育改革や幼保一元が進む中で、専門職としての幼稚園教諭、保育士、保育教諭に求められていることについて、それぞれのお立場からお話いただきました。参加した学生たちにも、わかりやすくお話いただきました。

今回の保育・幼児教育実践フォーラムでは、幼稚園、保育所、認定こども園の先生方、また大学や行政の方々のそれぞれのお立場から示唆に富んだお話を伺うことができ、改めてたくさんのお話を学ぶことができました。ありがとうございます。



分科会では、発表に対して
フロアーからも質問や意見が出され、
活発な協議会となりました。



全体会では、湯川先生から
これからの幼児教育の方向について
お話していただきました。

共育フェスティバル

平成28年10月30日(日)、人間開発学部第8回「共育フェスティバル」を開催しました。

今年度のテーマ「共育・響命・笑顔」のもと、地域の皆様を招いて、初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科の各企画委員を中心に21の企画を準備しフェスティバルを盛り上げました。



地域のご家族を中心とした1648名の方々にご参加いただき、活気あふれる1日となりました。

「学び」と「遊び」を通じ、地域と共に育つ「共育」に向け、学生たちが「子どもの成長」を考えるよい機会となりました。

夕涼み会

「夕涼み会のボランティアを経験して」

初等教育学科 4年 おおもり かのん
大森 花音

私は、2年生の時からインターンシップで新石川小学校にお世話になり、運動会等のボランティアにも参加してきました。特に、「夕涼み会」は、先生方や子どもたちに加えて、地域の方々とも触れ合うことができます。事前準備では、ブースの飾りつけをしたり椅子やテーブル、大きな氷等を運んだりしました。夕涼み会が始まると、唐揚げやおにぎり等の食べ物や飲み物を販売したことや、お客さんの呼び込みを声がかかるほど行ったこともありました。インターンシップ等で何度も新石川小学校の子どもたちと関わってきたこともあり、子どもたちから「花音先生、こんにちは。」と声をかけられることが多く非常に嬉しかったです。また、今年の夕涼み会では、新石川小学校の卒業生からも声をかけられ、子どもたちの成長をも間近で感じることができました。このことは、ボランティアを続けてきたからこそ感じる事ができたと思っています。

私は、来年度から教師の道に進みます。1年目は、初めてのことばかりで様々なことを吸収する1年になるのではないかと思います。ボランティアで経験したことを今後の糧にし、先生や子どもたちだけでなく地域の方々との関わ



りも大切にしていきたいと思っています。また、子どもたちの成長を間近で見られることは教師の醍醐味だと私は思います。夕涼み会で学んだ、「続けることでやりがいを感じることができる」ということを忘れずに、今後も様々な経験を積んでいこうと思っています。